

「キリストを恥じない」

テモテへの手紙第二

1 : 6 - 8、11 - 12

May.31.2020

第二テモテへの手紙1 : 6 - 8, 11 - 12 (パウロ)

Preface

私は、物心ついた時から、最も大切な人を恥じていました。
父と母のことを恥ずかしく思っていました。
私のことを命を懸けて、育て愛してくれた父と母のことを恥ずかしく思っていました。

なぜならば、若くもなく、洗練されてもおらず、家も風呂なしアパートで、人の親と比べた時に明らかに違うところが多いように思えたからです。

父と母を恥ずかしく思うことに、良心の呵責を覚えながらも、恥ずかしく思う気持ちが無くならず、むしろ、恥ずかしく思う気持ちを正当化するために、怒りながら口実を並べていました。

私が生まれた時に父はもうすでに50歳になっていました。私が小学校4年生の時には、もうすでに還暦になっていて、周りから見れば、お父さんというよりもおじいちゃんのような感じでした。

戦前から在日韓国・朝鮮人として、差別という差別は骨身に染みるほどに体験してきて、おらゆる職に就き、ただただ家族だけを男手ひとつで守るために、まさに身を削りながら働き続けました。

建物の防水工事の職人として働いていたのですが、50歳半ばぐらいから、腰の椎間板ヘルニアが悪化して、手術をしても治るかどうかわからないような状態になっても、仕事を休むことは一切せず、やがて右足を引きずるようになり、感覚がマヒし、夏でも冷えてしょうがないので、幾重にもサポーターを巻き、靴下も2枚以上履いて仕事に行っていました。

中学2年生ぐらいの時に、朝6時30分ごろ、足を引きずりながら仕事に出かける父の背中を見て、心がチクッとするような気持ちと、大きなあすごいなあという気持ちと、どらバカ息子で申し訳ない気持ちなど、色んな気持ちが入り混じった気持ちになりました。

私の家にはいわゆる自家用車はなく、仕事用のアスファルトべったりのトラックしかありませんでした。

なので、家族で出かける時も、買い物も、学校や塾へのお迎えも全部、アスファルト付きの青いトラックでした。

もうそれが恥ずかしくて、たまりませんでした。

今でも鮮明に覚えているのが、上野の松坂屋に家族で行った時、松坂屋の駐車場は東京なので立体駐車場なのですが、うちはトラックなので、そこには入れないんです。

それで、普通お客さんが止めないような業務用のところに駐車したんです。

駐車係のおじちゃんの視線も気になり、道を行き交う人たちの視線も気になり、恥ずかしくてたまりませんでした。

そして、父のズボンは、いつも作業着です。ポケットがいっぱい付いている作業用のズボンで、デパートに入っていくのです。

それも、もう恥ずかしくてたまりませんでした。

そして、母は母で、「何言ってるんだい！ お父さんが身を粉にして働いているために使っているトラックを恥ずかしがっちゃ駄目よ！」って言うんです。

その真つ当な言葉が、また心に刺さって、「なんで俺は、こんな家に生まれたんだ！」と、怒りが湧いてきました。。

母は、在日韓国人ではなく、父と結婚するために韓国から日本にやってきましたので、日本語もわからなければ、日本の文化もわかりません。

私の小学校の入学式の時に着せるんだと、イトーヨーカドーに僕を連れて行き、赤いジャンパーと普通の半ズボンを買っていたほどです。

愛情あふれる母なんですが、そんな母が、私には洗練されていないように映って、これまた恥ずかしくてたまりませんでした。

父と母のことを良く知ってもいないのに、知ったふりをして、自分の的外れな好みに合うか合わないかだけで、父と母を恥じていました。

本当に、恩知らずで、見てくれ重視の、世のものさしや世の価値観に染まって、一番大切な人を恥ずかしく思うような薄情な人間でした。です。

Part One

今朝は、聖霊が弟子たちに下り、新たな神と人との関係が構築されたことを記念するペンテコステの日ですが、弟子たちに聖霊が下って、大きく変わったことがあります。

それは、“キリストを恥じる者から、キリストを恥じない者へと変えられたこと”です。

使徒の働き 2 : 1 - 4、14 (パウロ)

イエス様が約束された通り、救いの完成を知らせる聖霊降臨が弟子たちに起こりました。

そこで、最も大きく変わったのが、弟子たちの姿です。
外見ではなく、内側が変わりました。
どう変わったか？

キリストを恥じて、隠れていた者から、キリストを誇り、キリスト者であることを恥じない者へと、変えられました。

イエスを信じるキリスト者であることが恥ずかしいどころか、自分たちがキリスト者であることを知って欲しい、そして、クリスチャンだからこそ語れることを語りたい、知ってもらいたい、聞いてもらいたいと思うようになりました。

キリスト者・クリスチャンとは、主イエス様と深い関係になってしまった人の呼称です。

イエスゆえに救われ、イエスゆえに生まれ、イエスゆえに養われ、イエスゆえに成長し、イエスゆえの人生になった、イエス抜きには自分という存在があり得ない人たちのことを、クリスチャンと言います。

14節で、人々に「あなたがたにイエスを知っていただきたいから、ぜひ私の言葉に耳を傾けてください。」と、声を張り上げている12弟子のリーダーペテロも、イエス抜きには語れない人生を歩んできた張本人ですが、イエス様を恥じた者でもありました。

イエス様が、それまで聞いたこともない語り口と権威がありながらも、温かく、心に響く言葉で、子どもから大人まで、男性女性問わず、無学な人から博学な人まで、ブルーカラーからホワイトカラーまで、すべての人を魅了し、人々の心を驚づかみにして、ローマ帝国の栄華をかつさらっていくほど話題になり、ペテロの世的なプライドまで満たしてくれる時は良かったのですが、

十字架刑という愚の骨頂をさらしたイエス様のことは、到底受け入れることは出来ませんでした。

十字架刑という最低の恥をさらしたイエス様のことが、恥ずかしくて恥ずかしくて、それまでのプライドもズタボロになり、二人といない恩人、またお師匠さんでもあるイエス様を恥じるようになりました。

マタイの福音書 26 : 67 - 75 (パウロ)

私は、父や母が、手を振っているのに、恥ずかしくて知らないふりをしたことがありました。

「そんなことはしちゃいけない」と思いながらも、作業着の、トラックの父が、日本語が話せない母が恥ずかしくて、知らないふりをしたことがあります。

でも、家に帰れば、また何食わぬ顔して、母の作ってくれたおいしい手料理を食べながら、母の足を抱きながら寝るのに、外では、恥じていました。

そんな私に「お兄ちゃんは、ずるい。」と妹が言っていたこともありました。

人の目を気にして、世の基準にそぐわないと思って、勝手に両親を恥じていた恩知らずな薄情な奴でした。

ペテロも薄情な者でした。

イエス様ゆえに神を知り、イエス様ゆえに命を与えられ、イエス様ゆえに人生に光が差し、イエス様ゆえに人からも注目され、イエス様ゆえに肩で風を切るような気持ちにもなり、イエス様ゆえに癒され、イエス様ゆえに真理を知り、イエス様ゆえに救われたのに、

そのイエス様が、世のものさしで押し量った時に、人生のレールから外れ、色あせ、見る影もなく、没落したかのように、すっかり落ちぶれてしまったように思えた時、ペテロは、イエス様を恥じました。

世的な輝きも、きらめきもなく、落ちるところまで落ちたイエス様を恥じました。

唾をかけられ、こぶしで殴られるイエス様の痛みを感じるよりも、公然と唾をかけられ、こぶしで殴られるほどに、みじめな姿になったイエス様を、恥じました。

人の痛みよりも、自分のプライドと的外れな好みが勝りました。

そして、イエス様を見捨てました。

これが、肉の思いです。

これが、私たち人間の浅はかさです。

これが、私たち人間の残忍さです。

これが、私たち人間の偽善なる装いです。

そして、そんな肉の思いや、浅はかさや、残忍さや、偽善なる装いを、他人には見出しますが、自分の中には見出そうとしない狡猾さを持っているのが、私たち人間です。

そんな者たちのために、父なる神様は二人といない、ひとり子イエスを十字架に架けて、贖い、救ってくださいました。

ある牧師先生が、子どもがもうすでに7人いて、8人目の子どもが生まれようとした時、奥様と相談して、7人の子どもを育てるのも大変なのに、今度生まれてくる子は子供のいない兄夫婦に養子に出そう。もしくは、今いる7人の子ども内、一人選んで養子に出そうと決心したそうです。

そして、夜、子どもたちが部屋いっぱい川字になって寝ていた時、牧師先生と奥様は、誰を養子に出そうかと相談し始めました。

上の子から順に、寝顔を見ながら、考えたわけです。

「長男は、長男だから大人ぶっているけど、まだまだ子供だから養子には出せない。長女も、まだまだかわいい盛りで養子には出せない。次男は、まだおねしょをするから養子には出せない。三男は、体が弱いから養子には出せない。次女は、まだおしめをつけているから養子には出せない。四男は、断乳したばかりで養子には出せない。五男は、まだおっぱいを飲んでいるから出せない。お腹の子は、生まれてもいないから、養子には出せない。」

そして、ご夫妻で泣いたそうです。「みんな可愛くてしょうがない！養子に出せる子なんて誰一人もいない！」

これが、親の心です。

どんなにたくさん子どもがいたって、可愛くて、尊くて、大切でしょうがないのが子どもです。

でも、父なる神様は、ひとり子イエス様を、十字架へと引き渡しました。

肉の思いに満ちていて、浅はかで、残忍で、狡猾な私たち罪人でさえも、ひとりひとりが尊くて、永遠の滅びに至ってしまうことを見て見ぬふりなんか出来ずに、その心を痛み、なんとか救い出したいと、

二人といないひとり子イエス様を差し出してくださいました。

これが父なる神の愛です。

そんな父なる神の思いも知らずに、キリストを恥じるペテロのためにも、イエス様は十字架に架かってくださって、赦し、愛してくださいました。

ペテロだけでなく、他の弟子たち全員が、イエス様を恥じて逃げて行きました。

“親の心子知らずな”弟子たち、そして私たち罪人、人類のために、父なる神様が主イエス様を十字架に架けて、

永遠の滅びから贖いだすという、死んでも生きるという、そして神の国を生きるという、天の御国で永遠に栄光と喜びに包まれて生きるという救いを完成さ

せてくださいました。

Part Three

イエス様は、十字架に架けられて亡くなる前に、「完了した。」とおっしゃいましたが、その後、十字架の死よりよみがえり、40日間弟子たちに現れた後、天に上って行かれ、天の御座にお着きになり、本来あるべき神としてのご栄光のうちに、今も私たちのために取りなしていただいています。

そして、この救いの業が完成したという証拠として、聖霊を弟子たちに注いでくださいました。

でも、こんなことは本来、あってはならないことなんです。

創世記6：1－3（パワポ）

神から与えられた聖く貴い男女の性的結合が、神と人がひとつであることを象徴しないようになってしまったため、主なる神様は、「わたしの霊が、永久に人のうちにとどまることはない。」と、宣言されました。

ゆえに、私たちは、神と断絶し、霊的に死んだ者となりました。

つまり、人は、神の霊が、もうこれ以上、共にできる存在ではなくなってしまったんです。

主エジプト記20章を見ますと、角笛の音とともに、主なる神様が、シナイ山の頂に降りて来られるのですが、それを見ていたイスラエルの民たちは震え上がり、恐れしました。

そして言うんです。「神の声を直接聞いてしまうと、死んでしまうかもしれないから、神様が直接お語りになりませんように！」と訴えるんです。

この出来事が良く表していますが、私たちは、神と共にいられる存在ではありません。

ましてや、神の霊が私たちに注がれた日には、即死です。

なのに、なのに、新約聖書に入りますと、「わたしの霊を注ぐ。」とおっしゃるんです。

復活されて弟子たちに現れたイエス様は、

ヨハネの福音書20：21－22（パワポ）

とおっしゃるんです。

どんな裏切り者であろうとも、どんなに薄情であろうとも、どんなにキリスト

を恥じて逃げて行ったとしても、あなた方のための救いは完成したという証拠として、弟子たちに神の霊を注ぐと約束され、実際に聖霊をくださいました。

つまり、イエス・キリストゆえに、罪赦し、神の子とし、聖霊が住まう存在に変わった、変えたということです。

キリストを恥じて逃げた者たちのためにさえ、救いを施してくださったということの確証です。

キリストを恥じるとは、神と断絶することを選び取って行ったということですが、父なる神と御子なるイエス様は、それを良しとせず、神の霊を注ぐことによって、神との関係回復を成し遂げてくださるんです。

こちら側がどうであれ、神様側から、関係回復を取り持ち、成してくださったんです。

迷惑な話でしょうか？

いやいや。ここに父なる神の愛があるんです。

“親の心子知らず”と言いますが、子は、いつも事態の深刻さを見抜けません。深刻さを見抜けなからと言って、放っておく親がいますか？

いないですね。親は、子がどう思おうと、事態の深刻さから守り、脱却させるために、全力を尽くします。

これが親心、親の愛ですね。

恥を忍んでも、命を懸けてでも、子を守りたい、子と親しい関係でありたいと思うのが、親心ですね。

とは言っても、時に人の親は、そうなれないことがあります。父なる神は、とことんその愛を貫かれます。

その証しが、聖霊降臨です。

Part Four

第一コリント 6 : 17、19-20 (パウロ)

キリストという代価が支払われたために、もうこれ以上、私という人は、私のものではなく、神のものであり、神と一体であるという栄光に与る者となりました。

2000年前のペンテコステの日に、聖霊が臨んだ事件は、

人類唯一の、そして人類にとって最も大事な、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神様の救いの業が完成したことの宣言です。

神の霊を注がれた弟子たちは、心燃やされ、キリストの体である信徒の群れを、教会を建て上げていきました。

すると、キリストの救いを宣言する信仰共同体が建て上げられることを良しとしない世の中が、キリスト者を迫害し、苦しめ、殺害まで始めました。

そしてその殺害は、合法であるため、どんなにクリスチャンを殺めたとしても罪に問われることはなく、むしろ賞賛を受けました。

キリストの体を、神の国を建て上げようとするキリスト者の生き方に、真っ向から戦いを挑み、妨げようと躍起になったサタンや悪魔たちは、時の権力者の力まで用いて、クリスチャンたちを追いやっていきました。

西暦64年には、ローマ皇帝自ら放火して、大火事になったその責任をクリスチャンたちになすりつけ、クリスチャンたちをとっ捕まえて、次々と殺していきました。

そして、やがて、恐れに捕らわれたクリスチャンたちに、再び、キリストを恥じる空気が流れ始めました。

キリストを信じたところで、苦難ばかりあり、迫害が収まる気配もない。

いやむしろ、迫害に拍車がかかり、生きた気がしない。

クリスチャンであることを辞めよう。キリストを宣べ伝えることを辞めよう。信仰者であることを隠そう。集まって礼拝をささげることを辞めようという思いが、クリスチャンたちに蔓延しようとしていました。

それは、平信徒のクリスチャンばかりでなく、教会指導者たち、牧師や伝道師たちにもそういう空気が流れ始めました。

そこで、書かれたのが、使徒パウロの生前最後の手紙となり、結果的に遺言書のようなものがテモテへの手紙第二でした。

結婚もせず、子を持たないパウロが、「愛する我が子テモテよ。」というほどに、テモテは、まさに使徒パウロにとって、我が子でした。

テモテは、この時エペソ教会の若いけれども、真摯で、敬虔で、熱心な牧師でした。

そんな真摯で、敬虔で、熱心な牧師であったテモテでさえも、迫害を恐れ、臆病になり、キリストを証しすることを恥じ、

自分を育ててくれた使徒パウロのことさえ、キリスト者ゆえに囚人となっていると、恥じるような思いに駆られるほど、気が滅入っていました。

そして、聖霊によって燃やされていた信仰が、しばんで行ってしまうような霊

的停滞、危機に陥ってました。

そんなテモテに、パウロ先生はこう語り掛けます。

テモテへの手紙第二 1 : 6 - 12 (パウロ)

パウロは、テモテに言います。

「恥じてはならない。決して恥じてはならない。キリスト恥じてはならないし、世の価値観やねじ曲がった暴力に屈してはならない。この苦しきは、キリスト者として生きるために、誰もが当然通らなければならない困難だから、決して、折れてはならない。」と、論じます。

映像で見ることは出来ませんが、パウロがこの手紙をテモテに書いた時、声を振り絞り出すかのように、涙ながらに書いたことを感じます。

パウロは、自分が信じてきた方のことを良く知っていました。

罪人の中の罪人の自分さえも、お救いになるために十字架に架かってくださり、復活してくださり、神の子とし、不滅の神の栄光にまで入れてくださった神の愛を良く知っていました (12節)。

パウロ先生は、キリストを良く知っていました。

キリストを知ることを人生とし、

キリストを知ることこそ、人にとって最も大事なことであるということを知っていました。

イエス・キリストがなしてくださったことは、全部良いことだということを知っていました。

たとえそれが、苦しくて、つらくて、痛くて、孤独で、納得がいかないことでも、ひとり子をお与えになったほどの父なる神のような愛は、この世に存在しないということを知っていました。

そして、神の愛を確証するために、聖霊が臨んでくださったこと、またその聖霊によって、魂燃やされた事実を決して忘れませんでした。

さらに、信仰をあきらめ、信仰を捨て、キリストを恥じようとする誘惑に陥った時に、今一度、聖霊が奮い立たせ、燃やしてくださることも知っていました。

だから、

テモテへの手紙第二 1 : 6 - 7 (パウロ)

と、訴えるんです。また、

テモテへの手紙第二 1 : 14 (パワポ)

と命じます。

Conclusion

私たちキリスト者のうちに、聖霊が共にいてくださるという事実は、揺るぎません。

しかし、世の価値観、プライド、苦しみや困窮によって誘惑され、染まりそうになる時、キリストを恥じるような思いに捕らわれて、心が冷たくなっていきます。

そのため、私たちは、日々、聖霊の油注ぎを求め、神の前に出て行く必要があります。

聖書を見ますと、聖霊は炎のように下り、父なる神は火のように現れます。

私たちは、火であられる神様のそばにいる時、私たちの心は温まります。

そして、私たちの心の火花はしぼむことはありません。

心が温まると、人生が温かくなります。

すると、子が親の愛に気付くように、神の愛に気付きます。

子は、親の愛を真に知った時、親を恥じなくなります。

それが、なかなか納得に行かない形や方法であったとしても、その動機が純粋な愛であると悟った時、子が親を恥じなくなるように、

神の子なるクリスチャンも、父なる神を恥じなくなり、御子なるイエス様を誇るようになります。

だから、日々、聖霊の油注ぎを求めて、いつもイエス様のそばにいてください。

私たちみんなの人生が、聖霊の油注ぎゆえに燃やされ、温かく、明るくなりますよう願ってやみません。

お祈りしましょう。

祝祷：テモテへの手紙第二 1 : 7 - 8